「兵役拒否・平和主義・エキュメニズム」研究会

林市造・本川譲治の特攻死と信仰

山口　陽一

はじめに

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会によると、太平洋戦争における特攻死は6,418人、うち航空機による特攻死は3,903人である。特攻死を受け容れるということは、良心的兵役拒否あるいは兵役忌避と対極の選択であると考えられる。その中には相当数のキリスト者もいたと思われる。その中から、信仰が明確で、特攻死を受け容れる経緯の証言が残る二人の青年について考察する。キリスト教の平和思想は良心的兵役拒否の思想的根拠の一つであるが、日本におけるキリスト教がその役割を果たし得なかった理由を探る試みである。

1. 林市造について

京都帝国大学から学徒出陣した林市造は、1945年4月12日、神風特攻隊として出撃し、与論島東方の敵機動部隊に突入し戦死した。23歳だった。3月31日に朝鮮北部の元山から母親に宛てた最後の手紙が残されている。

「お母さん、とうとう悲しい便りを出さねばならないときがきました。（中略）ともすればずるい考えに、お母さんの傍にかえりたいという考えにさそわれるのですけど、これはいけない事なのです。洗礼を受けた時、私は『死ね』といわれましたね。アメリカの弾にあたって死ぬより前に汝を救うものの御手によりて殺すのだといわれましたが、これを私は思い出して居ります。すべてが神様の御手の下にある私達には、この世の生死は問題になりませんね。エス様もみこころのままになしたまえとお祈りになったのですね。私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気がするのです。私は聖書と讃美歌と飛行機につんでつっこみます。（中略）お母さん、でも私の様なものが特攻隊員となれたことを喜んで下さいね。死んでも立派な戦死だし、キリスト教によれる私達ですからね。でも、お母さん、やはり悲しいですね。悲しい時は泣いて下さい。私も悲しいから一緒に泣きましょう。そして思う存分ないたら喜びましょう。私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます（後略）。」

市造の部隊はその後、鹿児島の鹿屋に移動し、出撃する4月12日までに、母に宛ててさらに3通の手紙が書かれた。それ以前の手紙、友人や家族への手紙、また市造が1945年の1月から書き始めた日記「日なり楯なり」、友人たちの手記などから、林市造の特攻死とその信仰について考えて見たい。

林市造は1922年に福岡市荒戸で生まれた。父俊造は内村鑑三に影響を受けたクリスチャンで、母のまつゑは夫に導かれて受洗し熱心な信仰者となった。市造は荒戸のホーリネス教会で兼牧師から幼児洗礼（献児式）を受ける。俊造が東京帝国大学農学部助手として上京し、家族はまつゑの実家、宗像郡吉武村中ノ尾の祖母の隠居所に仮寓したが、俊造の病死により2歳の市造は、姉の千代子と博子、弟の満喜雄とそこで育てられた。母は吉武小学校で裁縫の教師を務め、4人の子どもを連れて桑原信牧師の津屋崎教会に通う[1]。村の名士の娘である母は、吉武村伝道会と称して桑原牧師や西南学院院長のドージャー、スペンサー宣教師を招いて伝道する。しかし、軋轢や迫害もあったようで、市造が小学校5年生の時、母は子どもたちの教育のために福岡に出る。市造は修猷館中学から福岡高等学校に入学した。高校では寮に入り、呉アサ会の牧師田中種助（遵聖）から洗礼を受けた。福高にはYMCAがあり、福岡アサ教会の牧師河野博範（豚崖）が講師を務めていた。このアサ会については後述する。市造は、家庭でも高校でもキリスト教的な環境の中にいて、家族と讃美歌を歌い、仲間たちと神を論じ合った。市造は小柄でがっしりした体型で愛称は「豆造」、頬はふっくらし、口数は少ないが下唇を突き出してしゃべり、スポーツ万能で海洋訓練部の主将として博多湾をヨットで運航し、星や花にも詳しい天真爛漫な青年だった。哲学を志したが、家の貧しさを顧慮して経済学部を選び、京都帝大ではわずか一年の大学生活を満喫した。

2. 林市造の特攻

林市造は福岡高等学校を繰り上げ卒業し42年10月には京都帝国大学経済学部に入学した。1943年9月に文系学生の徴兵猶予が停止され、10月21日の明治神宮外苑競技場での学徒出陣壮行会に参加、12月9日には佐世保海兵団に二等水兵として入団した。海軍第14期飛行予備学生として1944年2月1日に土浦海軍航空隊に配属され、海軍第14期飛行予備学生となる。5月28日に鹿児島の出水航空隊に配属、9月28日には朝鮮の元山航空隊に配属され、特攻隊要員として速成訓練を受けた。10月21日にレイテ島において神風特別攻撃が開始され、12月25日、第14期飛行予備学生は少尉に任官された。

1945年1月1日、日記「日なり楯なり」を書き始める。題名は詩篇84篇11節からとられている。3月31日、特別攻撃命令を受け、冒頭に記した母への最期の手紙を書く。4月1日、鹿児島の鹿屋基地に到着、連合軍が沖縄に上陸し特別攻撃命令が出され、4月6日から菊水一号作戦に特攻が発動された。8日に戦艦大和撃沈。4月12日から菊水二号作戦が行われ、市造は第二「七生隊」の一員として出撃した。第十次までの菊水作戦が6月まで続き、陸海軍の航空特攻で約4,000人が戦死した。学徒出陣の内、海軍の予備学生の特攻死は第13期が448人、市造の第14期が163人である[2]。母まつゑは5月下旬に市造の学友である土井堅太郎から市造の戦死を知らされ、5月30日の新聞でこれを確認した。

林市造の遺稿（手紙）は1949年4月、福岡高等学校第19回文甲同窓会編『雁來紅―村上・林・中村三氏遺稿集』に掲載された[3]。林が母に宛てた手紙の一部は、福岡高校の友人で東京大学に進学した伊東一義の提供により『きけわだつみのこえ』（1949年10月）に収録された。また、Charles von Doren ed., Letters to mother, Channel Press,1959. に日本人としてただ一人 Ichizo Hayashi の ”The Day After Tomorrow I Must Die” が収録され、林はクリスチャンであることが紹介されている。他にも『きけわだつみのこえ』からの転載が複数ある。

母まつゑが1981年に亡くなり、1982年に姉の加賀博子編『林市造遺稿集 日記・母への手紙 日なり盾なり』が出版（私家版）され、95年に改訂版が櫂歌書房から出版された。市造の福岡高等学校の友人で一緒に受洗した湯川達典による『特攻隊員林市造 ある遺書』は1989年に九州記録と芸術の会から発行され、1993年に櫂歌書房から再版されている[4]。

また、蝦名賢造『太平洋戦争に死す 海軍飛行予備将校の生と死』（西田書店、1983年）、森岡清美『若き特攻隊員と太平洋戦争 その手記と群像』（吉川弘文館、1995年）、多田茂治『母への遺書 沖縄特攻林市造』弦書房、2007年）、石川明人『戦場の宗教、軍人の信仰』（八千代出版、2013年）が、林市造を紹介している。

市造と一緒に田中遵聖から洗礼を受けた福岡高校の学生は、猪城博之[5]、園田稔[6]、湯川達典で、彼らを田中牧師に引き合わせたのが河野博範である。湯川達典は市造の2年先輩で、高校から京大までの友人、アサ会の会員であった。信仰の友、秀村選三[7]、最後まで市造と共にいて冒頭の母への手紙を託された梅野正四郎[8]、出撃前夜に市造が私室を訪ねた土井堅太郎、市造が教会に導いた矢野烋夫、また森春光[9]、吉田荘八、伊東一義[10]、岩田達馬[11]、土持綱之などがいて、その多くが福岡高校 YMCA から京都帝国大学までの友人たちである。

3. 林市造とアサ会

林市造の信仰について、母まつゑ、田中遵聖とアサ会、福岡高校 YMCA の交友から考察してみたい。母は、夫に導かれて入信したものの十字架が自分の為とわかるのに10年もかかったと娘に語っている。家族の信仰は津屋崎教会の桑原信牧師に支えられており、娘の博子には、深夜庭に出て一心に祈る母の姿が崇高に見えたという（『日なり楯なり』p197）。市造の信仰は母から受け継いだもので、母子家庭の長男の母への思慕は格別だった。

市造に洗礼を授けた田中遵聖（1885 ～ 1958年）[12] はアサ会の指導者である。1928年夏に八幡山中の番小屋で、信仰の行き詰りを覚えていた河野博範（豚崖、1901 ～ 79年）[13] と一か月を過ごしアサ会（キリストの霊をアサと呼ぶ）が生まれる。アサ会は西部組合の若手教師たちの間に広がり、1931年12月に田中、河野らはバプテスト教会と決裂した（「アサ会事件」[14]）。寺園喜基は、河野博範から「信仰という語は、信ずる人間の方に力点がかかり人間中心主義の傾向をおびている。信仰における本当の主体は神であり、人間はただ神に受動的にしか関われないのだから、「信仰」よりも「受け」と言うべきだ、と教えられました」と言う[15]。

田中遵聖の晩年の説教集『主は偕にあり』[16] や、長男小実昌の小説『アメン父』、『ポロポロ』などに遵聖の、十字架のキリストを「受け」、十字架に「奪われ」、キリストと「直接する」という特異な信仰を見ることができる[17]。

湯川達典は言う。「いよいよ戦争が苛烈になって僕らの友達が多く出征するとき、田中先生から洗礼を受けた。先生は『汝死ね』と大声で三度ほどおっしゃった」（湯川 p100）。市造は、元山からの母への手紙に「洗礼を受けた時、私は『死ね』といわれましたね。アメリカの弾にあたって死ぬより前に汝を救うものの御手によりて殺すのだといわれました」と書いていた。これは母ではなく、田中遵聖牧師の言葉である。湯川は続ける。

「死ぬということばは僕らもふんだんに使っていて、そのためこの御言葉も別に耳新しくひびかなかった。思えば僕らは自分で簡単に死ねると思っている、おめでたい人間だった。僕は病気で戦争にも行かず家でぶらぶらしていた。ふとしたことから河野先生をお尋ねし、アサ会の礼拝にも出席するようになった。（中略）戦争はますますけわしくなり、河野先生と二人で讃美しながら泣き出したこともあった。何かさけることの出来ない大きなものが僕に迫っていた。田中先生の『汝死ね』という言葉が新しい意味を持ってよみがえって来た。僕らが自分で死ぬということではない、一つの義が僕らに死を迫った。死なねばならぬというのでは

ない、生きていなければならぬというのでもない。そのような人間のかかわりの世界とは全然別なところで、一つの事実が脈々と事実していたのである。」（湯川 p101）

これは1947年6月29日付で『アサ』に寄稿された文章である。最後の部分は、好むと好まざるとにかかわらず死と向き合わざるを得なかった世代の、この世からの超克を意味しているが、アサ会の信仰がそれを後押ししたように思われる。

市造は、高校一年の春休みに河野博範の読書会で永野羊之輔[18]らとキルケゴールの『死に至る病』を読む。市造は特攻に臨む朝鮮の元山でこれを再読し、吉田荘八に「暇を見つけて『死に至る病』を読了した。人生に対する猛烈なファイトが湧いてくるのを感ずる。高校以来逃げ回っていた俺だが。」と書き送った。絶望を超えて悟ることがあったのであろう。秀村選三は、河野が福岡高校YMCAでバルトを語っていたという。森春光は、彼が「啓示を受けると言っても、それまでには努力が必要だ」と言ったのに対し、林が「それは単なる人間の小さないとなみに過ぎぬのではないか」と答えたと追悼文に書いている（湯川 p113）。ここにはアサ会とバルト神学の重なりを窺うことができるかもしれない。そして、アサ会の覚醒は市造たちに幼き日の信仰を蘇らせた。

秀村選三は、旧制高校から大学までの「黄金（こがね）の時、珠の日」から学徒出陣へと向かう日々を振返って言う。「彼は私のポケットの聖書や内村鑑三の『後世への最大遺物』をずっと読んでいたが、二人ともたしかに真剣な生活を送らねばならぬが故に、異端を誇っていた私たちも幼い日の信仰が蘇りつゝあったのではなかろうか」（『日なり楯なり』p141）

市造の母への敬慕は、冒頭の3月31日の手紙に「私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気がするのです。」という言葉からもわかるように母の信仰あるいは母への思慕と結びついていた。2月27日の日記には次のような一節がある。

「私は私の母が信ずる神を信じているということは何という強味だろう。すべては神のみむねであると考えてくると私の心はのびやかになる。神は母に対しても私に対しても悪しくなされるはずがない。私達一家への幸福は必ず与えられる。私はいつか死んでも、いつか母と一緒にたのしく居ることを夢に見る。」

石川明人は、「市造にとって、『神』『イエス』そして『讃美歌』は、信仰の要点であると同時に、母との最も確実な接点なのであった」と評している[19]。

朝鮮から鹿児島の鹿屋に移ってからの手紙には、「お母さんの、千人は右に萬人は左にたほるとも……のかいてある国旗も身につけてゆきます」とあり、「我々にとりて生くるはキリストなり死するも又益なりです。」とある。そして、本当に最後になった出撃前日の手紙は「今日は学校のオルガンで友達と讃美歌を歌ひましたよ。」で閉じられる。

4. 林市造の特攻死と信仰

姉の博子によると市造の愛唱讃美歌は322番（1931年版、現行337番）「わがいけるは、主にこそよれ、死ぬるもわが益、またさちなり」であったという（湯川p58）。

一　わがいけるは　主にこそよれ
　　死ぬるもわが益　またさちなり
二　とみもちゑも　みな主のため
　　ちからもくらいも　また主のため
三　せめもうゑも　みな主のため
　　うれひもなやみも　また主のため
四　主のためには　十字架をとり
　　よろこびいさみて　われはすすまん

これが特攻前夜、あるいは特攻の瞬間に歌われた讃美歌かどうかはわからない。市造は、鹿屋からの母への手紙に「敵の行動にぶり勝利は我にあります。私達がつっこむことにより、最後のとどめがさされましょう。うれしいです。我々にとりて『生くるはキリストなり死するも又益なり』です。これが痛切に思われます」と書いている（『日なり楯なり』p71）。また、市造は元山での最後の晩、土井堅太郎の留守の私室を訪れ、引き出しの飛行服の写真の裏にこう綴った。

友に伝へよ　我が止むに止まれぬ命を
For me to live is Christ. To die is also gain
甘酒くみて酔はん日のかたみに

ピリピ1章21節「生くるはキリストなり死するも又益なり」、讃美歌「わがいけるは、主にこそよれ、死ぬるもわが益、またさちなり」は、洗礼において「死ね」

と告げられた市造が特攻を受け容れた信仰であったのであろう。

湯川達典は言う。「彼らは『皇国の礎となるために死ぬ』と書いているが、それは戦争末期に二十歳前後となった人間の、精一杯の生き方でもあったと思う。彼らの遺書が、父母や兄弟姉妹への限りない優しさに満ちているのは、そのような死＝生き方しか選べなかった人間の真情であろう。」（湯川 p41）[20]

森岡清美は『若き特攻隊員と太平洋戦争 その手記と群像』を以下のように結ぶ。「学徒出身特攻隊員の手記を読めば分かるように、彼らは肉親を守り、国土を守り、日本を滅亡から救うために、生還の可能性のない出撃を敢行したのである。かりにも殉国の戦死が犬死と言われるとすれば、彼らの誠実な献身を犬死たらしめた戦争指導者、陸海軍の作戦指導部への糾弾、ひいては戦争責任の追及が、犬死の指摘に続かなければならない。」

森岡は、伊東一義が敗戦から50年を前に記した手記「雲の果ての林市造」の最後の言葉を引用して自身の著書を締めくくる。

「特攻ということは、これほど人の心を苦しめる。あってはならない戦術である。林だけではない。陸海数千人の特攻隊員がこの世界戦史にもほとんど稀な無謀な戦に斃れた。戦後五十年たっても、私はこれを許すことができない。五十回忌の祈りも、この炎を消すことができない。」（『日なり楯なり』pp157 ～ 163）

湯川の言葉を借りれば「そのような死＝生き方しか選べなかった」林市造について、ここまで思いめぐらしてきた。ここには、当時の「軍人勅諭」の「只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ」、「教育勅語」の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」の帰結がある。当時、皇国・皇道・国体などと呼ばれた天皇制は「いのち」をこんなにも軽くしたのである。

特攻死と向き合う市造にとって、信仰と讃美歌は母につながる通路であり、特攻死という現実の超克であった。しかし、これは「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です」（ピリピ 1：21）とパウロが語った生き方とは、似て非なるものである。天皇や国家にいのちを捧げる価値があると思うように教育し、犬死させた国と天皇の責任が追及されなければならない。私たちは、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」（憲法前文）なければならない。その上で、「死ぬことは益」と讃美歌を歌って死ぬことしか教えられなかった教会こそが問われなければならない。

5. 柏木教会の本川譲治の場合

もう一人は柏木教会の本川譲治である。本川は1937年のクリスマスに植村環牧師から洗礼を受け、慶應義塾大学在学中に学徒動員で、林市造と同じ海軍第14期飛行予備学生となり、1945年5月11日に台湾沖航空戦において特攻隊員として戦死した。キリスト教信徒の家庭に生まれ、旧約学者の中澤洽樹、無教会の伝道者浅野猶三郎の指導も受けた。大分県佐伯海軍航空隊基地から中澤洽樹に宛てた手紙が残っている。

「（前略）戦局正に筆舌に尽し難き折柄、私も愈々最善の御奉公を致すことになります。帝国の存立に関する此時、大空の丈夫たる者、誰か勇気と忠誠に溢れないものがありましょうか。幸福なる国に生まれた感謝は本当に限りなく、此国の隆盛を、然り神の嘉し給う隆盛を祈ること切であります、顧れば多くの人々より、色々なる御恩を戴き身の幸福を泌々と思います。特に霊的方面に於て、私を御教導下されし方々に、何と感謝を申し上げてよいか知りません。私は小型の聖書と洗礼記念に柏木S・Sから戴いた讃美歌を持って行くことにします。聖書と讃美歌こそ人類に与えられし救いの兆であります。イザヤ・エレミヤ・アモス・ホセヤ・ザカリヤ・パウロ・ヨハネ・ペテロ・マタイ、而して主イエスの聖書は永遠であります。今手許にケーベル博士随筆集、蘆花のみみずのたわごと等があります、その他にミケランヂェロのイザヤ・エレミヤ・天地創造・楽園喪失等の写真書があります、また手帳に記したテニスンのイン・メモリアムも忘れ難きものであります、とにかく我等には永遠の希望があり、永遠の生命が約束されています。然しパウロの書いた様に、罪人の頭たる意識はかすか乍ら我胸をいたませます、然し一切を聖手に委ねまつつて感謝するのみであります。

我が家も疎開するかも知れぬ由、全く地上の幕屋は暫時であります、この復活節の時にあたり、朽ちざるものを着んことを切に求めます。

讃美歌一八〇、二六〇、二六二、二七五は私の愛誦するものです[21]。上よりの御平安、祝福あれ、また会う日まで―さようならです。」（昭和二十年四月七日）

「（前略）私も南方の星を望みつつ攻撃の最前線に出動、勝利と栄光の日を目指して、只管闘志を燃やしています。今は公用のため一寸こちらに帰り、長閑な春を楽しんでいます、最前線の緊張と比べて、この幸福を味える国民を、本当に祝福したい気持で一杯になりました。又近々出動しますが、大いに慎重なる態度を持して、頑張る覚悟であります、勝利の曙光がほのかに見えます、日本人の心に真の悔改めと、敬虔の念の宿る時、その時が栄光の日、感謝の日であります、不

死鳥の如く焼土の中より飛び立つ様を、想像し希望に踊ります、『たとえ死の蔭の谷を歩むとも、禍害を恐れじ、汝われと共に在せばなり』であります、先生も郷土の防衛に立たれる由、御苦労であります、一切を善きに導き給う聖手に委ねまつつて、我ら言い知れぬ平安に満たされます、ヌン・テクナ・テウー・エスメン[22]あのヨハネの確信に溢れる聖句を繰返します。では至らぬ者のためにお祈り下さい。遥かに御平安を祈ります、では生きていたらまた書きます、再た会う日まで。」(昭和二十年四月二十一日)

林市造は天真爛漫、本川譲治は折り目正しいという印象であり、いずれもキリスト者として明確な信仰を抱いて特攻により死んだ。彼らは熱狂的な国粋主義者ではなく、アメリカへの敵意も靖国の英霊となる願いもなく、一方で、非戦論者でもなかった。

6. いのちの用い方

林市造は、アサ会の信仰を自らのものとしたように思われる。アサ会の特異な信仰は日本的なバルト受容の一つの形と言えるかもしれない。本川譲治は、日本基督教会と無教会の信仰を忠実に継承した。いずれも当時の知的エリートのキリスト者として、国のために命を捨てた。キリスト教の信仰はそれを助けた。日本のキリスト教においては、良心的兵役拒否がほぼ見られないのと同時に、死にたくないという理由からの兵役忌避も少ないのではないか。

それは、キリスト者の真面目さであり、犠牲の精神であり、臣民教育が育んだ愛国心のゆえであり、その上で、人知を超えた神と永遠のいのちの信仰がこれを支えた。キリスト教の非戦論はあったが、良心的兵役拒否には進まず、命を惜しむことを教えることは控えた。

特攻を志願して生き残り、戦後は牧師として平和運動に尽くした大塩清之助は、出征兵士を見送る度に、「この人たちが死んで自分は生きていていいのか」という思いにとらわれ、1943年、中学5年の秋に予科練を志願し、同時に洗礼を決心したという。牧師は、戦争を美化したり、青年たちを戦争に駆り立てるような説教はしなかったが、「説教や談話の中で、日本の戦争を批判されたのを聞いたことはなかった(多くの牧師がそうであったであろう……)。そこで、教会におけるイエス・キリストの十字架と復活の福音と、学校における国家主義教育とが、わたしの心の中では合理的に一つに結びついてしまったのである」と回顧している 。

国のための死を至上の価値とするのが国家神道であるゆえに、国家神道から良

心的兵役拒否が生み出されることはあり得ない。しかし、日本においてはキリスト教もまた良心的兵役拒否を生み出すことはなかった。この事実は、キリスト教が国家神道の価値観に取り込まれていたことの査証と言える。

良心的兵役拒否の理論を日本にもたらしたフレンド派（クェーカー）は、日清戦争に際して頓挫し、日露戦争を期に顕れた非戦論はキリスト教非戦論と社会主義非戦論に分化し、後者は徹底的な弾圧の対象となる。前者からは良心的兵役拒否の実践が萌芽する。矢部喜好はその稀有な例であり、多くの場合、非戦論者も従軍した。内村鑑三は絶対非戦の立場に立ちつつ兵役につくことを認め、終末論的に非戦論者の死が平和をもたらすとし、非戦論の理論と実践を分けた。「逝けよ両国の平和主義者よ、行いて他人の冒さざる危険を冒せよ、行いて汝等の忌み嫌う所の戦争の犠牲となりてたおれよ」[23]という態度は、兵役拒否をしない愛国者の非戦論を形成した。

おわりに

日本における平和主義研究においては、良心的非戦論の萌芽に注目するとともに、いのちを守るための兵役忌避を評価することが重要である。菊池邦作は、徴兵忌避の歴史を振り返り、「忌避者の心の中に一貫して流れる共通したものは、極めて自然な人間性から発した自己を守るための抵抗の精神である。それは人間が、その生命の尊厳を侵されようとするとき発生する極めて自然にして、自己に忠実な意志の表現であって、それは人間として誇るべき行為であった」と言う[24]。村田豊明は、兵役忌避を卑怯と考える良心的兵役拒否研究を批判して、「非」良心的兵役拒否の思想の評価を訴えた[25]。佐々木陽子も良心的兵役拒否に対して徴兵忌避を劣位に位置付ける序列化の陥穽を指摘する[26]。

戦争のために死ぬ覚悟があるなら、戦争を拒否して死ぬことができないものか。そのような思いで良心的兵役拒否を考えてきたが、その前提として、生きることを願うあらゆる選択を尊いとするキリスト教でありたい。林市造と本川譲治の特攻死は、信仰者としての生き方とキリスト教信仰のあり方を問いかけている。

〈註〉

1 朝早く赤間駅まで馬車で行き、福間駅まで汽車に乗り、馬鉄で津屋崎の教会に到着、礼拝出席は一日がかりだったという。

2 森岡清美『若き特攻隊員と太平洋戦争 その手記と群像』吉川弘文館、1995年（2011年復刊）、54頁

3 発起人は園田稔。「雁来紅」は葉鶏頭の漢名で漢詩に詳しい岩田達馬が命名した。

4 湯川達典『特攻隊員林市造 ある遺書』櫂歌書房、1993年（以下「湯川」）

5 猪城は福岡高校YMCAの中心人物で、後に九州大学の哲学教授となり、『キリスト教と日本文化』などの著書がある。

6 園田稔は戦後共産党に入党した。

7 秀村選三は、後の九州大学経済学部教授、日本経済史、無教会。古代ローマ史の秀村欣二は実兄。

8 梅野正四郎は、九州帝大法文学部から海軍第14期航空専修予備学生

9 森春光は、京都帝大から陸軍に入隊

10 伊東一義は、戦後、旧制福岡高校戦没者186名の全記録を編む。

11 岩田達馬は、東京帝大中国文学科から出征、戦後は多摩地方の小学校教諭、『多摩の子』編集

12 田中はシアトル組合教会で久布白直勝牧師から受洗、東京学院（関東学院）神学部に学び、若松バプテスト教会および久布白の後継として東京市民教会を牧会、1925年から27年にかけて十字架のキリストの霊に与る経験をし、27年に小倉の西南女学院シオン山教会に赴任した。田中は当時呉アサ教会の牧師。西部組合の呉バプテスト教会でアサ会を広め、同教会の信徒阪田久五郎（セーラー万年筆の創立者）の別荘にアサ教会を設置した。作家の田中小実昌は遵聖の子である。アサ会は日本基督教団に加わるが43年12月に離脱し、アメンの友を経て1952年にアメン教団となり呉市に事務所を置いた。田中の死後、女婿の伊藤八郎が継承したが次第に衰退した。2012年に教団名を「あいのひかり教団」に変更し事務所を静岡に置くがこれはアサ会の継承ではない。福岡アサ会が今日も活動を継続している。

13 河野は九州帝国大学卒業後の1939年から福岡高校のYMCA講師となり、九州大学の宗教学助手、宮崎大学教授を経て西南学院大学教授となる。

14 枝光泉「『アサ会』事件」『宣教の先駆者たち―日本バプテスト西部組合の歴史』ヨルダン社、2001年。枝光はこの事件を、「一九三〇年代の初頭にあって『一教会の独立を認め、他の誰にも干渉されない（バプテスト派の）原則』から離れていた西部組合が、ミッション依存の体質から抜け出し、自ら歩み出そうとしたときに起こった象徴的出来事であった」と評している。

15 寺園喜基「バルト神学の根本問題」『西南学院大学神学論集』2010年3月、100頁

16 田中遵聖『主は偕にあり 田中遵聖説教集』（アメンの友、1977年）新教出版社復刊、2019年

17 『ポロポロ』（中央公論社、1979年）には人間の思いを超えたキリスト臨在の信仰がよく描かれている。「ポロポロ」は異言のこと。『アメン父』（河出書房新社、1989年）によれば、1940年の遵聖改名願いには、「『聖』なるものに『遵』ふの道これを『アサ』と称しもって『遵聖』を名とし『アサ』を教会名」とするとある。

18 後に広島大学文学部教授（倫理学）、訳書にトゥルナイゼン『ブルームハルト』新教新書。『折鶴は讃美する：ある舌癌患者のあかし 広島大学文学部教授永野羊之輔先生遺稿』アメンの友、1967年。

19 石川明人「特攻の死と信仰」『戦場の宗教、軍人の信仰』八千代出版、2013年、163頁

20 市造は、徴兵検査で福岡に帰っており、土持綱之に「おふくろが飛行機だけには乗るなよと言うのよね」と笑いながら言った（『日なり楯なり』p153）。市造は元山で書いた母への手紙に、「母チャン、母チャンが私にこうせよと云われた事に反対して、とうとうここまで来てしまいました。私として希望どおりで嬉しいと思いたいのですが、母ちゃんのいわれる様にした方がよかったかなあとも思います」と書いている。娘の博子は「柳こうりが届けられて日記を読んだ母が大学ノートを畳に投げつけて『母チャンが云わんことじゃない』と泣きくずれ、終戦の日には、気の長い穏やかな母が、決然と「大西中将には死んで頂く」と叫んだことを記憶に留めている（湯

川 pp57 ～ 65)。

[21] 現行讃美歌 199、271，260，284 番

[22] νῦν τέκνα Θεοῦ έσμεν「我等いま神の子たり」、ヨハネ第一の書 3 章 2 節。日付は不明であるが、本川は玉川直重から、「是は現在事実を示す直説法である。そのすぐ後に…έσόμεθα（We will be）の未来形のあるのは何と嬉しきことではありませんか」という説明の言葉とともに、この聖句を送られ、玉川先生の如く、寝に就くとき時にこれを誦え、朝目醒むるとき、この句に新しき歓喜と能力を与えられています、と記している。(『永遠の幕屋へ』2010 年、p68)

[23] 内村鑑三「非戦論者の戦死」『聖書の研究』明治 37 年 10 月

[24] 菊池邦作『徴兵忌避の研究』立風書房、1980 年、p112

[25] 村田豊明『「非」良心的兵役拒否の思想』新泉社、1982 年

[26] 佐々木陽子編著『兵役拒否』青弓社、2004 年、p188